

## <論文>物神貨幣から象徴貨幣へ（Ⅳ）：貨幣形成をめぐる現代の論点

著者	岡田 裕之
雑誌名	経営志林
巻	31
号	3
ページ	43-63
発行年	1994-10-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00016073">http://hdl.handle.net/10114/00016073</a>

## 〔 論 文 〕

## 物 神 貨 幣 から 象 徴 貨 幣 へ (IV)

## — 貨幣形成をめぐる現代の論点 —

岡 田 裕 之

## 目 次

- 第Ⅰ節 貨幣の謎——問題提起
- 第Ⅱ節 商品からの貨幣の形成。貨幣＝商品説の根拠
- § 1 マルクスの貨幣形成論
- § 2 メンガーの貨幣形成論
- § 3 一般均衡論における貨幣の形成  
〈以上、第30巻第4号〉
- 第Ⅲ節 現代貨幣における価値実体の欠如、貨幣＝国定説の根拠
- 第Ⅳ節 貨幣の水平的基礎と垂直的基礎。その相剋  
〈以上、第31巻第1号〉
- 第Ⅴ節 象徴貨幣の現代の論点
- § 1 循環貨幣論と代理貨幣論——貨幣形態Zは成立するか。岩井説批判
- § 2 象徴貨幣の言語シンボル同型論——現代貨幣の原始的貨幣からの照射。吉沢説批判  
〈以上、前号〉  
〈以下、本号〉
- § 3 正統化暴力による貨幣形成論——信用貨幣の両義性と暴力。アグリエッタ＝オルレアン説批判  
(1)(2)  
〈以上、本号〉  
〈以下、次号〉
- 第Ⅵ節 現代の象徴貨幣——信用＝中間構造による貨幣の二階梯の象徴化。
- 第Ⅶ節 世界貨幣(国際通貨)。国際金本位制の管理通貨制への転化
- 第Ⅷ節 貨幣の形成と進化(エボリューション)。結論と展望

## 第Ⅴ節 象徴貨幣の現代の論点(つづき)

## § 3 正統化暴力による貨幣形成論——信用貨幣の両義性と暴力。アグリエッタ＝オルレアン説批判

## (1)

現代における貨幣形成の第三の論点はアグリエッタとオルレアン二氏の共著『貨幣と暴力』において提出されている。<sup>1)</sup>

それは、商品秩序の中核である貨幣は秩序を形成する暴力、正統化暴力のつくりだす記号である、とし暴力を正面に押しだす主張においてきわめて独自のものがあり、一読して本書を理解するのはかなり難しいが、独善的な主張ではなく信用貨幣の形成を念頭におきながら組み立てられた、象徴貨幣形成の注目すべき見解である。

両氏にあっては貨幣は当初から記号であり、象徴であって、物神貨幣の形成を前提としたうえでその象徴化から二段構えで現代貨幣の象徴性を説明しようとする筆者の見解とは異なる。貨幣＝商品説を否定し、貨幣の価値実体を否定して直接にその象徴性、記号性を説くこの方法は、岩井、吉沢両氏と同じである。かくて、ここにまた現代貨幣形成論に共通する特徴がある。岩井氏における「価値形態の循環性」、吉沢氏における「共同体内コミュニケーション(交易)における聖観念」のかわりに、ここでは「社会に秩序をもたらす正統化暴力」が貨幣＝記号形成の原因にもちだされる。ア＝オ両氏における貨幣形成暴力は商品秩序を形成する動力であるが、この根源を暴力としてとらえねばならない理由は、両氏が商品－貨幣秩序を根本的に不安定性なもの、とみなしているからである。貨幣が商品交換の便利な媒介であり、

合理的で安定的な媒体であって経済均衡を生み出す、という“啓蒙的な見解”は拒否される。

「暴力」という概念は、経済学においてはふつうもちだされることの少ない、なじみのうすい概念であるので、両氏の議論の紹介にはかなりの紙幅を割かねばならない。<sup>2)</sup>

私がとくに両氏の議論を取りあげるのは、まず、両氏が現代のマルクス系の経済学ともいうべきレギュラシオン派の学者であって、この貨幣論がおなじく脱マルクスでありながら岩井、吉沢両氏とはことなつてマルクスを現代に生かす、という意図によって築かれているからである。<sup>3)</sup> もちろん、教条的な、古典の解釈、再解釈から出発するマルクス経済学の命脈は社会主義体制の崩壊とともに尽きている。<sup>4)</sup> 両氏の貨幣論は、政党＝正統流のマルクス解釈とは無縁な、その抜本的な再構築、脱構築からなされており、価値・使用価値論、価値形態論、貨幣機能論、競争・信用論、恐慌＝危機論を主流経済学である新古典派経済学から独立に、それに対する批判として、展開する立場に立つ。これが「暴力貨幣論」といういささか異様と思われる主張に筆者が耳を傾ける第1の理由である。

第2に、両氏のもちいる“暴力”という概念は、たんに国民国家の背景に立つ正統化暴力のみではなく、社会関係一般の基礎に存在するより原初的な単純暴力、粗野な暴力との必然の連関を強調するものである。ここに両氏の貨幣＝国定説にたいする批判があり、それとの相異がある。正統化暴力をよびおすものは経済社会に内在し、商品社会に内在する。これは、貨幣＝国定説が想定する一定の安定を保つ商品社会に国家が外部から公共「財」である貨幣を提供する、という想定を排除している。

両氏の暴力論は現代の世界の思想界を主導しているフランスの豊かな哲学上、思想上の風土から生まれている。両氏はレヴィ-ストロース、ブローデル、ボードリヤール、フーコー、等の成果を参照しつつ、とくにジラルルの欲望と模倣、供犠と正統化暴力の思想を貨幣の形成と運動に適用する。<sup>5)</sup> こうして、欲望－模倣（ミメーシス）－暴力、本質的・相互的・秩序形成的（供犠）－暴力、

というジラルル暴力論が両氏の議論を理解する「かぎ」となる。<sup>6)</sup> 両氏はこれを援用して、貨幣の形成＝価値形態論と信用貨幣・制度の不安定性を同時に説明しようとする。

伝統的な貨幣＝商品説と貨幣＝国定説を斥ける両氏の暴力貨幣論は、いささか意表をつく議論であるが、私はこれを貨幣＝商品説と貨幣＝国定説を信用貨幣の象徴性を軸にして、現代思想によって改編し、再編して、統合する試みの一つである、と“読み解き”たい。ともあれ、私は“暴力”概念の扱いにくさにもかかわらず両氏の議論が現代的な思想、思考に立脚しているその新しさに注意を払いたいのだ。古典の「読み直し」はつねに“知の新地平”に立つ新しい世代の問題意識と結びついている。

ア＝オ両氏はまず簡単な価値形態  $xA = yB$ （両氏の表記では第1フォルム、F I）を、各人がみずからの欲望対象を取得し、専有しようとする暴力的対立の表現であるとし、この欲望の相互的模倣と対立の解決不能な矛盾の形態とみなす。ただし、自己の欲望はその対象の客体からおのずから生じたものであるよりは他者の欲望を模倣したものであるがゆえに、その他者を、自己の欲望達成を妨害する他者、暴力によって排除すべき他者、とするからである。ジラルルはこのように考える。<sup>7)</sup> 使用価値はかくてまずすぐれて社会的な存在である。<sup>8)</sup> そして「奪い合い＝暴力」こそはあらゆる社会の根源にある関係である。

両氏のいう展開された価値形態（第2フォルム、F II）はこの相互的暴力が全面化する形態である。 $xA = yB$ の対立は  $xA = zC$ 、 $= uD$ 、……と拡がる。万人の万人にたいする闘いである。暴力は感染し、増殖する。こうして社会は暴力による解体の淵においつめられるが、この解体にひんした商品社会に「選別と排除」によって貨幣という核を形成して（一極集中 la polarisation）秩序を形成するものが創始的暴力（満場一致の暴力 la violence unanime）であり、それが危機的な価値形態（F II）の一般的価値形態（第3フォルム、F III）への帰結である。商品社会に秩序を与えるものは正統化暴力であり、貨幣はこの暴力によって形成された商品秩序の中核をなす記号である。<sup>9)</sup>

価値形態の完成にむけての発展は価値＝交換価値の未熟な形態から完成した形態への、価値表現の全面化、一般化、の平和のうちの進行ではなく、交換過程の不便（困難）の合理的打開ではない。商品社会の秩序形成の進行はただただ「暴力」による。

価値の労働への還元もまたはなから問題にならぬ。交換にさきだって労働なり効用なりの等質的存在があり、社会的実体がある、というのは幻想である。けだし、貨幣は個別経済主体にあらかじめ含まれている均質的存在を顕現したものではなく、貨幣こそはじめて社会関係を、社会制度を形成し、個別経済主体を社会内存在たらしめる主権だからである。<sup>10)</sup> こうして、両氏はマルクスの独創である価値形態分析を「継承」するのであるが、それは新しい哲学、思想にもとづいており、貨幣は価値と使用価値の矛盾から導かれるにしても『資本論』のいうそれとはまったく異なった内容をもつ。レギュレーション派の貨幣論はかくて新古典派の貨幣論を批判するのみでなく、マルクス派の古典をも容赦なく斬る。これを反マルクスゆえにきく耳もたぬ、というのはたやすい。だがマルクス経済学の終焉ののちに、『資本論』の脱構築が可能であるとすれば、それは反マルクスでなければならぬ。<sup>11)</sup>

ジラール暴力論の欲望－模倣図式の基層にはさらに供犠の役割にかんする人類学的認識が存在する。供犠は原始的社会における祭祀・宗教・誓約における普遍的な慣行であるが、共同社会における供犠に国権の淵源を求めるとき、社会秩序の暴力起源がこの供犠を介して明瞭になる、とジラールは言う。<sup>12)</sup> 国家権力がなかならず正統化暴力に依存することは社会科学、政治学の初歩的認識というべきもので正統化暴力論そのものはとくにジラールを援用するまでもなからう。<sup>13)</sup>

暴力こそ人間の社会関係の根幹をなすと考えたジラールは、ではなぜ社会は無制限の相互暴力のうちに解体せず、かえってさまざまな文明・文化を形成し、古代以来、さらには原始的社会の発生以来今日まで発展存続してきたか、に答えようとする。そのためには正統化暴力——すなわち政治権力——によって国家を介して解体に瀕した

社会の秩序が維持されねばならないが、この正統化暴力は供犠によって成立する。<sup>14)</sup> 共同社会のうちに暴力が常在するとき、相互的な復讐が蔓延し普及し許容されれば、当該社会はいずれ滅亡はまぬかれぬ。供犠こそはこの報復を回避する正統化暴力のなすべき業（わざ）である。つまり暴力の相互的な増殖を回避するには血の報復がその罪、責めを相殺すべき対象に向かうのであれば、反復する暴力の増殖は避け難い。復讐と仇討の論理は社会を滅亡に追いこむ。

かくて暴力を内在させる社会は、報復、復讐を断ち切ることなしには長期に存続し発展することはできない。近代社会はすでに法体系をもち、法による刑罰によって私的な報復を禁じている。だがこの法治社会の淵源はどこにあるのか。社会内の血の罪、血債を社会が責任のない無辜の人間の犠牲にもとめればどうなるか。暴力には暴力での復讐はそこでとぎれる。復讐は意味を失い、目標を失う。だが、この社会によって一致して選別され排除された犠牲者スケープゴートは暴力の対象となる。しかも負うべくもない責めを負わされて、社会の統合のために、殺される。秩序のための暴力、暴力を否定するための流血、この矛盾が供犠である。この犠牲は共同社会に奉仕する聖なる犠牲、祀られるべき犠牲であって、常在暴力の単なる犠牲ではない。この供犠を選び、聖観念＝社会秩序に捧げる暴力が正統化暴力であり、社会が承認せざるをえない暴力である。

ジラール供犠論はこのように組立てられる。オルレアン氏はとくに貨幣の起源をこの供犠の聖貨幣性に求め、ギリシアの牛貨幣は商品貨幣ではなく供犠の聖貨幣であるとし、これが貨幣の起源であると論じる。暴力を秩序化するための暴力が貨幣を形成すると言う。ここに価値形態が暴力によって貨幣にいたる論拠がある。<sup>15)</sup> 商品秩序およびあらゆる社会秩序が正統化暴力によって維持される以上、またこの商品秩序はきわめて不安定なものである以上、主権＝社会制度はその危機に際してくりかえし本質的暴力の混乱におちいる。危機は反復する。“暴力”概念はひろくは社会秩序を形成し、維持しながら、根底において主権＝社会制度を不安定ならしめるものとして用いられる。貨

幣はいわばその集中的表現であり、体化であって、“暴力”は選別と排除をとうして貨幣という社会的記号を形成するとともに、こうして形成された商品秩序、社会経済秩序に限りない不安定性を内在せしめる。

両氏の暴力貨幣論はこうしていかに異様にみえようと、それが二つの経済学、主流経済学である新古典派経済学と反主流のマルクス経済学に同時に重要なポレミークを挑んでいることを見逃してはならない。

すなわち、両氏の貨幣論はまずはマネタリズム批判に向けられていて、貨幣による体系の不安定性、通貨危機を強調し、岩井氏と同様にケインズとの親近性を示すが、限界効用分析に立とうと、労働価値説に立とうとおよそ価値論を拒否し除去する点において岩井氏とは異なる。経済理論の体系はこれまで価値という第一原理の基礎上に組上げられているから、価値論の拒絶は同時にこれら二つの経済学の拒絶となる。<sup>16)</sup> 貨幣の形成に即して言えば、直接交換の等価値性（平均労働投入量の等置にせよ、限界代替率による相対価格決定にせよ）は否定され、無貨幣の場合の直接交換の「不便」の貨幣による「除去」は否定される。

だが両氏が、暴力が貨幣を形成する社会にあっては社会矛盾は制御不能であり、アトム（個人）、階級、階層、その他の社会集団間の矛盾は解決不能であるがゆえに、“暴力”を必然とする、というとき、両氏はジラールに依ってマルクスを復活させるのであって、二つの経済学を同時的に批判する、といってもその立場は明瞭である。両氏は継マルクスを反マルクスにおいて主張しつつ反主流経済学の立場を貫ぬこうとする。

商品秩序の中核の形成が直接交換の不成立を前提して説かれる点においては、両氏の暴力貨幣論は吉沢氏の貨幣論と共通する。原始的貨幣、国家的貨幣、現代信用貨幣をつらぬく貨幣の象徴・記号性は正統化暴力という社会統合力によって直接に生まれる。<sup>17)</sup>

だが、こうして形成される貨幣による社会体系は不安定なものであり、所与の社会関係の危機—対応をとうして変化をまぬかれず、正統化暴力は

くりかえし出動して主権＝社会制度を変化せしめる。両氏はここで反復的構造のレヴィ-ストロースの構造主義に批判的立場を明確にする。暴力が形成する記号＝貨幣は、吉沢氏におけるような超歴史的な象徴ではなく、歴史的な変化の必然とともにある。<sup>18)</sup> 両氏の貨幣＝信用理論は、“フォーディズムの危機”と名づける直接的生産過程の編成と危機、という元来生産現場の社会関係、労使関係、経済余剰形成過程に力点をおいた分析に特徴をもつレギュレーション理論の「貨幣＝信用理論」として意図的に展開されたものであって、レギュレーションすなわち、経済危機への対応、調整という歴史的变化・変貌の説明を本質とする理論の構成部分をなしている。<sup>19)</sup>

さらに、両氏の暴力貨幣論は国家の外部性、あるいは中立性、合理性を否定する。正統化暴力は、両氏にあっては、まさに経済内的な存在であり（商品秩序の中核）、かつ不安定なものである。社会秩序はくりかえし本質的暴力にたちかえり、相互的暴力に解体の危機に迫られる。経済学においては国家は、あるいはマネタリズムのように経済中立的に外部にあるか、ケインズ派におけるように「合理的な不均衡是正者 *deus ex machina*（救いの神）」としてある。だが暴力に依拠し正統化暴力の反復する発動によってかろうじて秩序を維持する主権＝社会制度は本質上不安定である。中央銀行に合理的な政策の二者択一はない。ただ危険な動揺が存在するのみである。<sup>20)</sup>

マルクス経済学においては、経済＝下部構造と国家（政治・理念）＝上部構造の区分の二分法があり、プロレタリア国家の完全合理性の仮定がある。<sup>21)</sup> この意味においてマルクスの教義は捨てられるが、部分的な階級利害、差別利害が潜在化し無意識化しつつ普遍の看板に変わる国家のイデオロギー性は、両氏の貨幣＝信用論においてあらためて強調される。<sup>22)</sup>

しかし、私の観点からして両氏の象徴貨幣論においてより重要なのは、その信用貨幣論である。この信用貨幣論議においてもジラール暴力論の適用は顕著なのであるが、すでに形成された貨幣＝一般的等価形態・記号を前提とする信用貨幣論に

よる、マネタリズム批判の主旨は成功していて、しかも H. P. ミンスキーの金融不安定仮説などと照応させてこれを読むとき、両氏の難解な、いささか独善的な、暴力論議からはなれて、その貨幣＝信用論のチャレンジングな内容が理解できる。<sup>23)</sup>

暴力貨幣論はここでは、信用貨幣の両義性と階層性における暴力によって展開される。貨幣の両義性とは、現代信用制度下においては、貨幣は、統一化システムにおける「中央貨幣 monnaie centrale」——事実上、中央銀行貨幣——と、分裂化システムにおける「私的諸貨幣 monnaies privées」——諸私的経済主体が発行する債務証券、私的銀行貨幣など——の、二つの分裂しかつ統一されたシステムにおいて存在し、機能する、ということの意味する。そして、この両者が階層をなして連関しているのが信用貨幣の階層性であり、私的信用関係と中央銀行信用・マネーサプライの上下の重合関係をさす。<sup>24)</sup>

この貨幣の両義性と階層性を問題にするところでは、出発点は FⅢ、すなわち一般的価値形態である。かくて一般的等価（形態）の存在そのものは疑われない。前提される。<sup>25)</sup> この貨幣の両義性と階層性の発展は両氏の「価値形態」論議とは反対方向に進み、フォルムⅢ、正統化暴力から出発し、フォルムⅡ、相互的暴力、暴力の感染、を経過してフォルムⅠ、本質的暴力に至り、ふたたび正統化暴力が貨幣、FⅢ、を復興し、生産過程を回復し商品秩序を回復する。

これが暴力貨幣論の信用貨幣版の“あらすじ”である。

内容を紹介しよう。

統一化システムにおける貨幣、「中央貨幣、モネ・サントラル」は FⅢ、一般的等価形態、貨幣、を前提しそれから出発する。それは国民的中央機関 X（政府＝中央銀行＝中央商品取引所）が、個別経済単位  $i$  の債務集中に対応して発行する信用貨幣 A であり、個別単位の債務（赤字）合計  $\Sigma U$  とマネーサプライ  $\Sigma A$  の会計バランスが成立している。民間の負債は機関の資産であり、機関の債務は民間の資産である。<sup>26)</sup>

この統一的貨幣 A にあっては、交換関係は外面化し、A は補足的な公共社会存在の社会的記号

となっている。けだし、商品取引は機関に集中され、ただその現金残高のみが貨幣として存在するだけであり、貯蓄と投資もまた機関に集中され相殺されているし、 $i$  の所有する商品が販売されればその債務はそれだけ減少するからである。つまり債務 U は M（両氏の記号では商品、*marchandise* の M、筆者の記号、*money* の M とは異なる）によって担保される。 $i$  の商品が売れば  $i$  の債務、信用貨幣 A は破壊される、すなわち債務は返済され消滅する。両氏はこの貨幣の破壊制約を  $\{U-M\}$  で表示する。<sup>27)</sup>

他方、A は国家により貨幣たることが担保されているが、この  $A=M$  たるや不決定である。すなわち、A がどれだけの商品に最終的に担保されているかは不明であり、不安定である。これは信用貨幣 A の規範であるが、規範  $\{A=M\}$  が不決定なのだ。<sup>28)</sup>

この「中央貨幣」、中央信用貨幣にはまったく価値実体はない。また徴税票、徴税権に由来する国家紙幣でもなく、商取引の“あまり”を表す現金残高にすぎない。それは債権に保証された公共の債務証券、つまり機関を背にした信用貨幣である。それは社会の経済活動を補う、正統化暴力に支えられた、社会公共秩序の記号である。それはただ正統化暴力にのみ依拠する最終的な貨幣であり、価値そのものである。「中央貨幣」は、予算制約に従い債務を決済し支払うべき貨幣制約を生みだすのであるが、みずからはいかなる貨幣制約にも従わない無制約貨幣である。ここでは暴力は過剰である、と両氏は言う。

分裂化システムにおける貨幣は、「私的諸貨幣、モネ・プリヴェ（複）」である。これは、私的な交換領域において生まれ、破壊される私的な債務証券 V である。これらは私的な専有のために発生—消滅する。つまり私的専有の領域に内生的に生まれ、破壊される。返済され、債権者の手に還流し、消滅する。V は諸個別経済単位  $i/j$  相互間に発生する債務証券であり、信用貨幣である。<sup>29)</sup>

$V_i$  は典型的には  $i$  が投資収益を期待して貨幣資本を借入れることから発生する。V はもちろん

Aによって支払われ破壊されるし、 $\{V=A\}$  制約のもとで私的貨幣たりうる。だが、VがどこまでAによって裏付けられるかはさまざまな条件に依存するから、不決定である。 $\{A=M\}$  の不決定に対応するのは $\{V=A\}$  の不決定である。それはまず、経済単位*i*の投資による期待収益系列Rに依存するが、 $R_t$  (*t*は時点)の主体的均衡(予想利子率でのRの現在割引価値に依存する)はつねに不安定である。<sup>30)</sup> またVの民間金融市場における評価(債券の市場価格)も不確実である。*i*はVを将来収益によって返済しなければならず、予定外の困難に落ちれば予備現金を支払うか、資産、金融資産を処分しなければならぬ。

しかし、その場は私的専有の対立する修羅場であり、利子と利潤(資本限界効率)が対立し、黒字主体・債権者と赤字主体・債務者が対立する。社会の諸階級、諸階層の利害が私的専有をめぐって激突する。しかも返済期間Tは短縮され、 $T=0$ の傾向にいたる(「中央貨幣」では $T=\infty$ の傾向、放漫な中央銀行の再金融あるいは公信用、が現れる)。<sup>31)</sup> 信用秩序は混乱し、暴力は感染し普及して收拾がつかない。*i*と*j*は限りなく対立し、暴力は不足する、と両氏は言う。

経済社会、主権=社会制度は、この貨幣の両義性と階層性、集権化と分裂化の間を動揺する。

複数の私的信用貨幣は単一の公的貨幣に依存し、中央には決済が集中し(手形交換)、中央銀行は最後の貸手となる。VはAに依存するのに私的専有を争う諸主体の循環の内部にあって、生産過程と結合している。この生産過程は支払連鎖の不安定性の内部にあり、期待収益系列の不安定な主体的均衡とともにある。模倣は進行し、投機は感染し、実現収益は予想収益を下回る。 $R > R'$ 。返済期間は短縮される。 $T > T'$ 。利潤は下がり、利子率は上昇する。成長金融は破綻する。FⅢのFⅡへの転化、相互的暴力の展開である。<sup>32)</sup>

成長金融の破綻は社会の諸利害の対立を表面化し、硬直した社会制度・関係が変化と衝突する。中央銀行、国家は私的専有の相互的暴力に対応しなければならないが、両者は集権化か分裂化か、引き締めか再金融・救済か、のいずれかの一方向的な行動のあいだを危険なまでに動揺する。通貨

危機が必然となる。インフレーションすなわち規範 $\{A=M\}$ の危機、あるいは、デフレーションすなわち規範 $\{V=A\}$ 、民間市場における有価証券の評価、の危機は不可避的である。<sup>33)</sup>

インフレーションの危機は私的諸貨幣の価値増殖があやふくなるという困難、およびこの困難にたいする中央銀行による赤字残高の貨幣化によって生じる。危機はこの行動が債務証書をすこしずつ消滅させて困難を吸収しえない場合に高まる。インフレーションが物価と賃金のスライド化をうみつつ投資と成長を促進することはあるが、中央銀行はインフレ過程を統御しえない。貨幣の錯覚が維持されるあいだは貨幣=計算単位機能は維持されるが、模倣、諸価格のスライド化(インデクセーション)の行動が普及するとともに貨幣錯覚が失われる。スライド化の進展はまた物価騰貴の不均整、差異化でもある。再金融が行われればたしかに $\{V=A\}$  制約は一時的に弱まり、 $\{V=M\}$  (投資活動による貨幣の交換手段機能)を促す。<sup>34)</sup>

だがこの再金融は危険を潜在化する。クリーピング・インフレーションの限界が出現する。関係 $V/A_1$  (インフレ再金融)はすでに債権者が私的専有権を主張する減価の場でなくなる(破産含みの回収ではない)。貨幣秩序の解体の危険が、ある回路から他の回路に感染する。貨幣の価値保蔵手段機能が脅かされる。FⅢはFⅡに復帰する。貨幣Aを排除する満場一致が崩れる。中央銀行券にかわって、金・不動産・工場・有価証券・外貨、等A以外の富(両氏の記号では*s*)が求められる。投機の模倣は財*s*に一極集中し、投機の回路がAを押しつける。 $\{A=M\}$  に代わって $\{s=M\}$  が出現する。財*s*の自然価格は問題にならぬ。「私的諸貨幣」が財*s*という担保に依存すれば「中央貨幣」と「諸私的貨幣」の敵対関係が生じる。相互暴力は貨幣秩序を解体に追いこむ。Aはいまや財*s*によって評価される。商品・貨幣秩序はFⅡからさらにFⅠへ、粗野な暴力、本質的暴力の跳梁に至る。生産過程もまた投機、貨幣秩序の解体により妨害される。経済社会空間の解体は正統化暴力により阻止されねばならず、秩序はふたたび回復されねばならぬ。集権的貨幣戦略

は破綻する。<sup>35)</sup> FⅢが再現する。

貨幣秩序の再建は暴力的に、社会諸階級・諸階層に不平等に、部分的利害を軸に行われる。暴力を正すものまた暴力である。

デフレーションの危機は私的債務が履行されない危機である。デフレ危機においては、Aの超越性は攻撃されない。貨幣Aの諸機能は変わらず、Aが富であることは疑われない。他方V、私的債務証書は支払われない。再金融は拒否される。債務者は生産者であれ、金融仲介機関であれ逃げ道はない。物価は下落し、資産価格は崩落する。この損失は債務者だけでなく債権者をも襲う。Tは収縮し、短縮される。ひたすらA、「中央貨幣」が求められ、 $\{V-A\}$ が破綻するのでVの評価、関係 $\{V=M\}$ が破綻する。満場一致の一極集中はひたすらAに向かう。Aを除くすべてのものの価値が $=0$ となる。生産過程は停止される。分裂化貨幣戦略は破綻する。Aの貨幣価値がかぎりなく純粋化し絶対化すれば、Aはもはや私的紛争を媒介しえなくなり、私的専有にとって無意味になる。デフレのもっとも深刻な状況においては貨幣Aが絶対的に排除されてしまう。Aの無限の純粋性は貨幣の両義性の他の一方、「私的諸貨幣」の存続、関係 $\{V-A\}$ を否定してしまう。貨幣の両義性は復活されねばならない。新しい通貨ルールが生まれる。<sup>36)</sup>

両氏の議論が価値形態論、交換過程論、信用貨幣論の独自の理解と再編に立つ脱マルクスの貨幣形成論（および信用制度論）であることは明らかである。物神貨幣の労働実体は否定される。貨幣は正統化暴力が選別と排除によって創造した社会的記号であり、根本的に不安定な経済社会の秩序の象徴である。<sup>37)</sup>

この貨幣論はまずはマネタリズム批判に向けられ、貨幣量の操作によって「経済社会にある合理的秩序、均衡を維持することが可能である」という命題を否定する。貨幣の両義性と階層性、集権化と分裂化の間を動揺する公共政策、中央銀行政策は失敗する。貨幣＝信用制度はそれ自身に体系を不安定ならしめる本質をもっている。

両氏の主張はかくて、労働価値説と物神貨幣説に立つマルクスと新古典派的均衡論、貨幣ヴェイル観をともに斥けるのだが、それが生産における“フォーディズムの危機—調整”というレギュレーション理論を貨幣の面から基礎づける、という意図からすればむしろ現代においてマルクス系統の経済学を発展させようとしている、とも評価できる。マルクスは死に、ジラールを介しフロイトを介し、甦る。

#### 〔註〕

- (1) M. Aglietta, A. Orléan, *La violence de la monnaie*, Presses Universitaires de France, Paris, (1982,) 1984, アグリエッタ、オルレアン、井上他訳『貨幣の暴力』法政大学出版局、1991年。他に、アグリエッタ氏の国際通貨論、M. Aglietta, *La Fin des Devises Clés*, Edition La Découverte, Paris, 1986, 斎藤訳『基軸通貨の終焉』新評論、1989年、do., *L'enjeu de l'intégration monétaire*, 斎藤訳『通貨統合の賭け』（1989年の訳本を含む論文集）藤原書店、1992年、オルレアン氏の貨幣起源論、A. Orléan, “L'origine de la monnaie,” *la revue de MAUSS*, No. 14, 15-16, 1991, 1992, do., “The Origin of Money,” in F. J. Varela, J-P. Dupuy (eds), *Understanding Origins*, Kluwer Academic Pub., 1992, を参照した。

わが国における人類学の研究成果にもとづく類似の趣旨による貨幣論に、今村仁司『暴力のオントロジー』勁草書房、1982年、がある。

- (2) 正統化暴力はもちろん国家論には前提され、そして国家論は経済学の領域とはつねに不可分である。マクロエコノミクスの公共財、公共選択、移転支出その他において政治は決定的な役割を果たす。また、近代資本主義を基準と考えるとき、たとえば封建地代は「経済外的強制」から説明され、あるいは資本蓄積に先行する「原始的蓄積」が暴力から説明されたりする。社会主義経済体制の分析では共産党＝国家、官僚制が不可欠のカテゴリーとなる。暴力、なかんずく正統化暴力は経済学の視野の内部にある。

しかし両氏の暴力概念は人類学的研究に由来す



るもので、これまで国家、公共財、経済体制などで扱われたものとは様相を異にする。

- (3) R. ボワイエ, M. アグリエッタ, A. リピエツ, 等のレギュラシオン学派の経済学, 政治経済学的分析はわが国においては山田鋭夫氏を中心とするグループによって精力的に翻訳, 紹介されており, 多くの論客も来日しているので紹介するまでもあるまい。最近, ボワイエ・山田の共編で『レギュラシオン・コレクション』が企画, 藤原書店から刊行されている。同学派はフランスと日本で有名であるのみでなく, フランスの各地, ドイツに諸流派が分岐するほどである。
- (4) 岡田裕之「社会主義世界体制の崩壊とマルクス経済学の終焉」本誌, 第28巻第2号(1991年7月), 参照。
- (5) R. Girard, *Mensonge romantique et Vérité romanesque*, Edition Bernard Grasset, Paris, 1961, ルネ・ジラルール, 古田訳『欲望の現象学』法政大学出版局, 1971年, do., *La violence et le sacré*, Edition B. G., 1972, 同訳『暴力と聖なるもの』同局, 1982年, do., "To double business bound," *Essays on Literature, Mimesis, and Anthropology*, Johns Hopkins U. P., 1978, 浅野訳『ミメシスの文学と人類学』同局, 1985年。原文は未見。

ジラルールの思想, 哲学は現代のヘーゲル, フロイト, フレイザーの総合ともいえるべき壮大なものでその粗筋を紹介することすら私には不可能である。だが, 論文の主題の関する限り誤解をおそれずア＝オ両氏が依拠する論拠を要約すると, 以下のごとくである。ただ, 私にはここでジラルールの総合的な哲学, 思想, 人間観, 社会観他について論争を挑む意図はない。

まず, 第一の重要な論拠は欲望の三角形である。すなわち, 人間の欲望は対象から直接に発する主体の衝動ではなく, 他者という欲望獲得の敵手, ライヴァル, との関係の下で生まれ, その内部で発動される衝動である。他者を排除すべき欲望対象の専有, 独占が他者という媒介に依存するから, 欲望がみずからの主体から生まれたとするのは幻想で本来他者の模倣ミメシスである。他者に依存し他者を排除しなければならないこの欲望, 対象の専有衝動はかくて他者を排除する暴力を必然

的にともなう。

第二の論拠は供犠による正統化暴力の行使による社会秩序の形成である。欲望と暴力を根底とする人間社会は暴力の相互行使によりいつでも崩壊の危機にさらされているし, さらされてきた。共同社会のメンバーが暴力, 流血の対して暴力, 流血によって復讐し, 返礼すればたしかに共同社会は滅亡するだろう。文明社会は現在法秩序によって私的な報復を禁じ, 社会秩序を保っている。この起源はまさに共同社会の満場一致の暴力による供犠にある。儀礼も禁忌(タブー)もこの報復の直接の対象から各人の私的暴力の的をそらし, 復讐を断ち切る供犠にもとづく。社会成員はまず「スケープゴート」を選び出し, それに『悪』を集中し, 全員の憎しみを集めて暴力の感染を防ぎ, この全員一致暴力を「犠牲者」にあつめて血祭りにあげる。この「犠牲者」は社会に秩序をもたらす「聖なる」捧げものとなる。満場一致暴力は正統化暴力となる。人間社会の文明はかく暴力をその本質において宿している。

- (6) Aglietta, Orléan, *op., cit.*, (1982), 1984, pp., 5~6, 27~30, 56, 89, 152~153, 181, アグリエッタ＝オルレアン, 前掲訳『貨幣の暴力』, xv~xvii, 25~29, 69~70, 121, 211~212, 251頁。とくに指示がなければ引用は以下両氏のこの共著からのものである。

- (7) 「どの主人公も, 自分の選択によって欲望するという, もっとも個人的な特権を放棄している…」ジラルール, 前掲訳『欲望の現象学』, 61頁, 「われわれに暗示された欲望をわれわれが満たそうとする時, それを妨げる存在こそ, 正しく恨みの対象なのである。」同訳, 11頁, 「あらゆる欲望は抽象的観念にもとづいている。…真の人工太陽である媒体[ライヴァル, 欲望の三角形における——岡田]から, 目をあざむく輝きで対象[欲望の——岡田]をきらめかせる神秘的な光線がやってくる。」同, 19頁, 「欲望の三角形は二等辺三角形なのだ。したがって欲望は常に, 媒体が欲望する主体に接近するにしたがっていっそう激しいものとなる」同, 93頁, 「こうなると今や媒体は, 狡猾で悪辣な敵ということになる。媒体は, 欲望する主体からその最も貴重な所有物を奪いとりつつとめ, その最も正統な野心を執拗に妨げる者, というこ

になる」同、12頁、欲望＝模倣には媒体、ライヴァルを排除する暴力が潜む。

- (8) 他者に依存する欲望という概念は使用価値、効用の経済学における通念を否定する。使用価値はマルクスにあって超歴史的なものであり、ただ価値のみが歴史的であった（使用価値の歴史性に言及している場合もあるが、彼の体系においては使用価値は非歴史的である）。新古典派においても同様に財貨の効用は消費者アトムが認定、評価するものであり、この効用に立脚する限界代替率が財の相対価格を決定する。

現代ではこうした欲望の自生性、非社会性は認め難い。これは依存効果とか広告効果、生産者による潜在欲望の顕在化等においてすでに認められてはいるが、なお財貨、効用の基本理論を訂正するにはいたっていない。

私見によれば、所得水準の上昇にともなって、消費面では裁量的支出が増加し、社会内部の情報交通が盛んになって社会依存的消費部分が増加し、生産面では技術革新その他によって複雑な使用価値の製造が可能となって、新しい欲望が開発され、使用価値、効用自体の社会性、歴史性が強まってきた。しかしこれには石器時代の昔から消費は社会的かつ儀礼的であった、とのダグラス、浅田他訳『儀礼としての消費（1979）』新曜社、1984年、サーリンズ、山内訳『石器時代の経済学（1972）』法政大学出版局、1984年、等の研究があり反論がありうる。

- (9) 貨幣は正統化（創始的）暴力がうみだした社会関係の記号であり、社会的紐帯の象徴である。それは商品やなんらかの実体ではないが、循環する記号でもない。それは社会がその存在の超越性を信ずる観念、主権であって暴力を孕み暴力によって繰り返し再生する記号である。A=O, *op. cit.*, pp. 32~47, 前掲訳, 32~55頁。
- (10) A=O, *ibid.*, pp. 2~4, 15~16, 同訳, x~xiii, 8~9頁。
- (11) 岡田裕之「経済原論の再出発のために。政治経済学の新原理は可能か…」本誌, 第28巻4号, 第29巻2号（1992年1月, 7月）参照。
- (12) 「復讐は無限の終わりなき過程を構成する。…それは、一連の反応をひきおこして、小規模の社会なら致命的な結果を急速にもたらすのである。

報復の増殖は社会の存続それ自体を危うくする。」ジラルル, 前掲訳『暴力と聖なるもの』, 24頁, 「もちろん, 暴力から一切の捌け口を奪ってはならず, その暴力の歯の下に何らかのものを置いてやらない限り, 暴力をごまかすことはできない。」同, 6頁, 「ほんの些細な不和も, あたかも血友病における出血のように, 重大な災厄をさまざま惹起する世界では, 供犠[…つまり——岡田], 報復を受ける惧れの常でないいけにえ, 復讐という点について一様に局外中立で増殖不可能ないけにえの上に, 攻撃的性向を集中させるのである。」同, 28~29頁, 「供犠の機能は内部の諸暴力を沈静化し, 諸葛藤の爆発を妨げることである」同, 23頁, 「法体系は復讐を支配領域における至高の, 特殊化された一つの権威に実行を委ねられた唯一の報復にのみ限定するのである」同, 25頁, 「供犠や, 一般的に言って儀礼が本質的な一つの役割を演ずるのは, 法体系を欠き, したがって復讐におびやかされる社会においてである」同, 29頁。

供犠と暴力（王権）については、フレイザー、永橋訳『金枝篇（1890, 1910）』岩波文庫版（1925年簡約版の訳）、5分冊、A. M. ホカート、橋本訳『王権（1927）』人文書院、1966年、M. モース、H. ユベール、小関訳『供犠（1897, 1907）』法政大学出版局、1983年、他、参照。

- (13) ウェーバー、世良訳『支配の社会学（1922）』I II, 創文社、1970年、A. P. d'Entrèves, *The Notion of the State*, Oxford U. P., 1967, 等、参照。
- (14) 「ジラルルの仮説とは、君主制の原理が供犠の危機に端を発すると言うことである。最初の間、王は犠牲になることを猶予されていた。彼のもつ権力は、将来彼が生贄になることに依拠していた。君主制はしたがって、主権を生み出す排除-選出の過程が逆転した結果である。……生贄の実施が遠のき、やがて取りやめられるに至って王は聖なる権力の獲得者となるのである。そして、君主制の超越的権限だけが残ることになる。」A=O, *op. cit.*, pp. 152, 前掲訳, 211~212頁。アグリエッタ＝オルレアン両氏は続けて「貨幣は商品交換の手段となる以前に国家主権の属性である」と述べ、貨幣＝国定説に接近する。

貨幣における「王と臣民」の比喩は、浅田彰

『構造と力』勁草書房、1983年、において新しい粧いにおいて繰りかえされた。

- (15) オルレアン氏はギリシアの牡牛貨幣を人間犠牲を獣に代替した生贄の聖貨幣と理解し、金属鑄貨をその牡牛象徴の代替物とみなし、紀元前7～8世紀ギリシアにおけるポリス国家の危機と古代貨幣の発生を結びつける。供犠儀礼にはまたギリシア潜主やアレアレ社会（メラネシア）の「平和主」による「宝を返す」「宝を集めて破壊する＝神への返却」儀礼も含まれる。慣習社会における貨幣による価値保蔵への反感を解消しつつ、人間社会は慣習から正統性の信念にいたり貨幣によって見渡しうる広い時空という別個の次元を獲得する。ここにはジラール仮説への追加がある。貨幣象徴により共同社会は正統性の集団理念にいたり、欲望の互換性を認知する。cf., Orléan, "The Origin of Money," in *op. cit.*, 1992, "L'origine de la monnaie (II), la monnaie dans les sociétés holistes," *MAUSS*, No. 15-16, 1992.
- (16) A=O, *op. cit.*, pp. 15-21, 28-33, 前掲訳9-17, 25-33, 頁。
- (17) 両氏の著書は貨幣史の部分を含む。原始的貨幣と信用貨幣の部分は別として金属貨幣の部分は私のこれまでの説明とは異なる。古代地中海時代の古代的貨幣については私は貨幣史のこの説明の成否を判断できない。ただ紀元前の時代から13世紀の西欧の信用貨幣に跳ぶのは金属貨幣史、鑄貨史としては適切ではなく、暴力貨幣説、貨幣記号説を裏付けているとは思えない。同書、第4章。参照。
- (18) 構造主義は共時的な象徴世界を説明できるが社会関係の発生や発展の通時的变化を説明できない、と両氏はいう。A=O, *op. cit.*, pp. 16-17, 25-26, 前掲訳9-10, 21-22頁。
- 原始的貨幣と近代貨幣の連続性を強調する点において、両氏は吉沢説と共通するが社会制度の変化、貨幣関係の不断の再編成は両氏の独自の主題である。
- (19) フォーディズムの危機はレギュレーション学派のキー概念であり、アグリエッタ氏はこの概念を、著書、*Régulation et crises du capitalisme, L'expérience des États-Unis*, 1976, 若森他訳『資本主義のレギュレーション理論、政治経済学の革

新』大村書店、1989年、において提起して一躍注目を集めた。この書は実物経済の分析が軸で貨幣金融分析は補足的であったので、レギュレーション学派の貨幣・金融領域の分析が求められていた。現在、氏はこの方面に研究の重点をうつしている。

蓄積体制における赤字の貨幣化は独占的レギュレーションの不可欠のモメントであり、70年代のアメリカの金融革新と結合したインフレーション、デスインターメディエーション、ドルの対外危機は生産における危機をもたらした。A=O, *op. cit.*, 6, 7, 前掲訳、第6章、第7章がその具体応用分析である。また斉藤日出治「貨幣と金融のレギュレーション・アプローチ」『大阪産業大学論集・社会科学編』82号、(1991年3月)、参照。

- (20) A=O, *ibid.*, pp.123, 127, 同訳, 171, 176頁。
- (21) マルクスのプロレタリア独裁国家の死滅論は周知のところだが、この独裁国家がどれだけ権力の奢りと凶暴を極めたかはソ連史の示すところであった。もちろん共産社会の完全計画の想定も素朴にすぎた。
- (22) A=O, *op. cit.*, pp.113-116, 135-136, 前掲訳, 158-162, 187-189頁。
- (23) H. P. Minsky, *Inflation, Recession and Economic Policy*, Wheatsheaf, 1982, (*Can "it" happen again?*, Sharp, 1982), ミンスキー、岩佐訳『投資と金融』日本経済評論社、1988年。
- ミンスキーは金融不安定仮説を主張するときケインズよりもカレツキの枠組を利用する。カレツキは同じく有効需要の原理を発見し、それに基づく貯蓄＝投資のシェーマを立てるが、投資を主導するものは企業の内部金融（自己蓄積）でありこれを超える投資を実現する場合に外部金融（銀行借入、他）が行なわれる、と考える。ビジネス・デモクラシーを否定し、資本家の所有を強調する立場である。こうして投資を行なう企業は期待利潤（資本の限界効率）の不安定性、低下とともに、負債構成におけるリスクを負うこととなる。*ibid.*, chap. 4, 5, etc., 同訳、第4章、第5章他、M. Kalecki, *Selected Essays on the Dynamics of the Capitalist Economy, 1933-1970*, Cambridge U. P., 1971, chap. 9, 10, 他カレツキ、浅田他訳『資本主義経済の動態理論』日本経済評

論社, 1984年。

こうして利潤, 利子, 金融資産価格, 流動性選好のより錯雑した関係が現われる。カレツキとケインズの利子率, 利潤率, リスクの相関関係のちがいについては, 鍋島直樹「カレツキの貨幣経済論——ケインズとの対比において——」『一橋論叢』第104巻第6号(1990年12月), 参照。

- (24)  $A=O$ , *op.*, *cit.*, 2, centralisation et fractionnement, 前掲訳, 第2章, 集権化と分裂化。

これは, 一面では本稿のこれまでの貨幣(国家紙幣と商品貨幣)の垂直的基礎(交換外部性)と水平的基礎(交換内部性)の区別と相関につらなり, 他面では諸経済学派の貨幣の外生供給・内生供給, 金融資産の外部資産・内部資産の議論に照応する。

- (25) 信用貨幣においてはつねに一般的等価形態, 貨幣,  $F_{III}$ は前提され, そこに復帰する。 $A=O$ , *ibid.*, pp. 55~56, 60~61, 112~113, 同訳, 69~70, 77, 156~157頁。

- (26)  $A=O$ , *ibid.*, pp. 60~61, 前掲訳, 77~79頁。「モネ・サントラル」は中央機関  $X$  が発行する信用貨幣である。それは事実上「中央銀行券, ないしその預金貨幣」であるが, 機関  $X$  と中央銀行は同じではない。機関  $X$  はワルラス的な商品取引所でもある。 $A$  はかくてさしあたりパティンキン流の現金残高である。これに対し銀行の銀行である中央銀行は当初から交換領域の内部にある。両氏はこれを「中央銀行貨幣」と説明するところもあるが, 「中央信用貨幣」とするならともかく「中央銀行貨幣」は意識にすぎ, 「モネ・サントラル」, 「統一的貨幣」の概念設定の虚構性を損なう。前掲訳, 参照。

- (27) 「ところがこのさまざまな緊張の吸収は首尾よくなされるものとみなされているので貨幣方程式  $[A = \sum A(i) = \sum U(i) = U]$ ,  $X$  のバランスシート——岡田)はいかなる関連性のある規定をも有することのない余計な関係にすぎないかのように見える。直観的には貨幣はさまざまな市場の総体の貸借残高を扱う最終財という純真無垢な形式で現れる。貨幣の必然性は最終的には消え去ってしまうほどかすかなものだ。貨幣とは交換の論理に外から付け加えられた枠組にすぎず, 交換の

論理は貨幣の手を逃れている。」 $A=O$ , *ibid.*, pp. 61~62, 同訳, 79頁。

信用貨幣は破壊される, そのよって立つ債権—債務関係が清算されれば消滅する。

- (28)  $\{A=M\}$  は信用貨幣の破壊制約ではなく  $A$  がどれだけの  $M$  を支配するか, どれだけの  $M$  (商品) との交換手段となるか, を表示する。

- (29) 交換の外部にある貨幣とその内部にある貨幣, 集権化貨幣と分裂化貨幣, 単一の公的貨幣と複数の私的貨幣, の両義的で階層的な対立性と同一性という両氏のシェーマから理解すれば, 「モネ・ブリヴェ」の「私的銀行貨幣」という訳も適切ではあるまい。まず,  $V(i, j)$  は債務者  $i$  により債権者  $j$  にむけて発行される(振出される)債務証書であるが, これは  $i$  の事業による期待収益  $R_t$  の資金調達を表現する。 $V$  は  $A$  での返済という制約をもつ  $\{V=A\}$ 。 $V$  (社債, 手形, CP, 等) は民間金融市場で評価される  $\{V=A\}$  金融資産であるが, 銀行貨幣ではない。

商業銀行, その他の私的金融機関の設定(発行)する預金貨幣, CD 等もまた債務証書であり, 預金貨幣の設定(銀行の債務による借手の債務の発生)によっても事業活動の資本調達は可能である。その場合には私的銀行貨幣 ( $A_i, A_j$ ) が  $V$  を表す。 $V$  は  $A$  と対になる私的信用貨幣の一般的な表現である。「私的銀行貨幣」の訳は「中央銀行貨幣」の訳と組合わされたのであろう。「モネ・サントラル」も「モネ・ブリヴェ(複)」もいずれも信用システムの内部における両義性貨幣を暴力概念によって説明する対をなす理論上の設定である。前掲訳, 参照。

ただし経済単位  $i$  の債務証書  $V$  の発行による金融は金融機関(銀行)による新規負債発行による資産ポジションの金融を基準, 典型にして考えることもできる。cf. Minsky, *op. cit.*, pp. 145, 204, 前掲訳, 222, 296頁, 参照。

だが  $A=O$  両氏にあっては「モネ・ブリヴェ」は生産過程に直結する投資のための  $V$  が基準におかれている。

- (30) 資金調達と返済のキャッシュフローの齟齬, 困難, 破綻をもたらす動因は期待利潤(限界資本効率)の予期せざる変動である。この期待収益の現在割引の主体均衡は保証されない。 $A=O$ , *op.*,

*cit.*, pp. 68~70, 75~76, etc., 前掲訳, 89~91, 101頁, 他, 参照。

両氏はここでケインズとマルクスに言及する。Cf., J. M. Keynes, "The General Theory of Employment", in *Quarterly Journal of Economics*, Vol. 51, No. 2 (Feb. 1937), ケインズ『『一般理論』』ハリス編, 日本銀行訳『新しい経済学』I, 第15章, 所収, 参照。

- (31)  $A=O$ , *op.*, *cit.*, pp. 120~121, 80, 前掲訳, 166~169, 108頁。
- (32)  $A=O$ , *ibid.*, pp. 78~79, 103~104, 128~129, 同訳, 104~106, 143~145, 177~178頁。
- (33)  $A=O$ , *ibid.*, pp. 84~87; 3 Les crises monétaires, 同訳, 114~119頁, 第3章。
- (34)  $A=O$ , *ibid.*, pp. 98~104, 114~115, 同訳, 136~144, 160~161頁。
- (35)  $A=O$ , *ibid.*, pp. 103~113, 同訳, 143~158頁。第6章では財sへの投機の例に1922-1923年ドイツのハイパー・インフレーションにおける外貨(外為)投機があげられ, 1970年代アメリカのインフレーションを分析した第7章, 第8章においては, 投機が不動産, 住宅金融, 抵当証券, 海外ドル, 他にむかったことを示す。金融の制度改革, 自由化, 金融仲介排除, がこの投機を促進した。両氏は金融における制度改革の役割を重視する。
- (36)  $A=O$ , *ibid.*, pp. 123, 同訳, 170頁。
- (37)  $A=O$ , *ibid.*, 3, conclusion, part 1, conclusion, pp. 45~47, 83, 同訳, 第3章の結論, 第1部全体の結論, 他, 52~55, 112頁。

## (2)

象徴貨幣の説明における両氏の独自性は信用貨幣を正面にとりあげ, しかもそれを貨幣の両義性と階層性においてとらえ, そこに貨幣の記号性=象徴性を見出すところにある。両氏には現代貨幣の象徴性はたんなる商品・貨幣関係のみがはたらく単純流通世界においては存在しない社会関係によってはじめて説明される, という考えがある。この資本主義的生産とその流通(=金融)ネットワークという社会関係をまっしてFⅢ, 一般的等価形態(=貨幣)は象徴化され記号化される。信用

貨幣の両義性と階層性においてはFⅢは, 一方で正統化暴力(中央銀行・政府)に支えられて交換残高を金融する補足的公共信用の記号, A, となり, 他方では私的専有を争う私的債権・債務関係の記号, 諸V, となって $\{V-A\}$ 制約下に, 統一化と分裂化を体化する。

単純商品流通がすでに産み出す一般的等価物(=物神貨幣)が信用関係を媒介にして象徴化され, すでにして社会関係の象徴であった貨幣が価値実体を失ってもう一度象徴化されるという二階梯の象徴化が完成する, というならば私は両氏の意見に同意したい。私のこれまでの論旨は, 貨幣形成の伝統的な争点を吟味し, 商品説と国定説のそれぞれの意義を確定し, 貨幣形成の水平的基礎と垂直的基礎を両者の相剋においてあらためて説明し直したもので, 両説は物神貨幣という社会的象徴=記号を説明でき, 産業資本主義以前における金銀貨幣と国家紙幣の流通史を説明できても, 現代貨幣の二階梯の象徴性はなお説明できない, というものであった。

しかしながら, 私見は両氏の主張とは重要な点において異なる。この暴力貨幣論批判は今後の論旨に有用であるので, 価値形態論と信用貨幣論の2つの主題について批判を述べたい。

両氏の主張するところでは価値形態の発展は物神貨幣, 一般的等価物に至らず, 当初から価値実体なき記号=象徴に至る。あるいは貨幣は「価値」概念なき「形態」である。この貨幣の象徴=記号性格は, 両氏においては, 価値形態におけるFⅠ→FⅡ→FⅢの発展と信用関係におけるFⅢ→FⅡ→FⅠからFⅢへの復帰の過程の正統化暴力による媒介によって, 一挙に, 同時に, 説明される。両氏にあつてはフランスの現代思想家ジラールの模倣(ミメーシス)に発し, 供犠(全員合意のスケープゴートの犠牲化 unaimous victimage)における正統化暴力による秩序形成という“仮設”が貨幣の形成, 金融貨幣制度の本質的不安定性の説明に直接援用される。<sup>1)</sup>

たしかに, ジラールの欲望-暴力-供犠仮設はマルクス物神性論に代替しうる一個の強力な仮設ではある。マルクスは人間と人間の間の社会関係

の物による媒介、物と物の関係による社会関係の媒介による隠蔽、物の人格化、人格の物象化という概念を提出して画期的な経済学、社会科学を創始した。彼の経済学体系はこの物神性という思想の基礎の上に立てられているとも言っているのであり、その唯物論、唯物史観はこの思想的な概念を介してその経済学（批判）に具体化したと言いうる。<sup>2)</sup>

だが、この概念は共産主義ユートピアにおける直接的人間関係の復活という幻想と不可分であったために、貨幣論はじめ彼の経済学の全体系の破綻をもたらした。現代の象徴貨幣のマルクスからの説明が不能に陥っているのも、この物神性概念の不毛性、ないしは歴史的限界によっている。その“切れ味”のかつての見事さがかえって現代において「桎梏と化した」のだ。<sup>3)</sup> ジラールの模倣と正統化暴力という思想、概念はマルクス以降、とくに最近の構造主義以後（ポスト構造主義）の人類学、精神分析（病理）学、言語学、記号論、現象学、等、の包括的吟味に立つてつくられたものであり、ユートピアなき社会の秩序形成と不安定性を同時に説明しうる「壮大な仮設」となっている。<sup>4)</sup> アグリエッタ＝オルレアン両氏はこの思想、概念を社会制度の階級性、歴史性、不安定性の説明に適用可能と考えて、それを物神貨幣論にかわる記号貨幣論の樹立のために使ったのである。

ジラール仮設はこうして現代思想のエッセンスを吸収、批判したうえでつくられているので、非専門家による中途半端な批判を拒絶する。しかも人類学的な神話の基礎を実証によって反駁するのは不可能であり、筆者の力量をこえている。また歴史時代における貨幣史の事実立脚して論議をすすめるものにとってはこれら人類学的「証拠」は実証不能でありかつ反証不能であるように見える。<sup>5)</sup> ともあれジラール仮設そのものの成否の吟味にたちいることなしに、歴史時代の貨幣史の諸事実によって、実証－反証可能な範囲において、両氏の暴力貨幣論に批判を加えたい。

価値形態において暴力はなんらかの役割を果たすのか？ 簡単な価値形態 FI,  $xA=yB$  は本質的な暴力を表現するか？

すでにみたように、ここでも社会的物質代謝における三つの形態をまず区別することが肝要である。それは復習すれば、互酬、再分配、交換（市場）の三形態の区別であった。この区別は、社会的素材変換の現物形態（共同体首長による再分配を含む）から商品形態（市場）への変化、そしてその後の共産主義における現物形態（計画中央による再分配を想定する）への復帰というマルクスのシェーマを拡張するものであり、とくに互酬（相互授受）を独立させたボランニー、レヴィーストロースによって強調された。そしてこの三区分は人類史の歴史の経過の説明においても、現代資本主義の運動、特質を明らかにするうえでもマルクスの「物質代謝」の二形態シェーマより有用である。<sup>6)</sup> この区分は本稿における一般均衡論による貨幣形成論（サムエルソン）批判においても（第Ⅱ節）、吉沢氏の聖観念にもとづく象徴貨幣論批判（第Ⅴ節、§2）においても有効であった。そして、価値形態はなにかんずく互酬から生じるものでも、再分配から生じるものではなく、まったく商品交換から生じるものである。互酬社会における儀礼が媒介する「物質代謝」にあつては原始的貨幣は存在しえても価値形態は存在しない。不必要である。もの、共同紐帯のシンボルが核となり、互酬の連関が「物質代謝」を遂行する。

相互の欲望の対象を獲得しようとする過程が暴力に媒介されるならば、それは再分配に帰結する傾向をもつ。「物質代謝」の暴力形態はまずは強者による略奪となり、それが制度化すれば弱者から強者への貢納となるだろう。価値形態  $xA=yB$  がかりに欲望対象の争奪であるとしても、暴力に強弱なく勝敗がなければ、「物質代謝」は不可能となるか、互酬に至るか、交換に至り市場に赴くだろう。これに対し、暴力応酬、弱肉強食の崩壊からの社会の秩序ある存続をめざす正統化暴力はつまりは再分配という「物質代謝」の形態に至るであろう。いかにして正統化暴力は商品交換なしに「貨幣」を発見しうるのか。両氏はこの状況についてはなにも説明しない。欲望を模倣し財貨を専有しようとして他者を暴力で排除しようとする社会において「一般的等価形態」はマナのように天から降ってくるのか。<sup>7)</sup>

価値形態はかならず交換、取引、損得勘定、私的所有者の相互独立（自由・平等）の関係から発生する。そして交換がまたそれらの市民的諸関係、利害社会を緩慢ながらつくりだす。だが価値形態  $xA=yB$  を商品、商品所有者の社会関係とみなしたとしても、それをBを専有しようとするAの所有者とAを専有しようとするBの所有者の不一致、闘争とみなすならば、それは単に交換過程（偶然的交換）の行詰まりを下手に、素人風に、表現したものにはすぎない。<sup>8)</sup>

両氏は価値形態論は認めるが価値論はこれを排除する。貨幣はすでに生じている価値均衡の平板な媒介者ではなく、本質上不安定な価値関係をはじめて創造するものであるから、と両氏は言う。そこでは均衡と安定をもたらず価値概念は不要であり秩序をもたらしつつも不断に本質的な不安定性をやどす正統化暴力こそ貨幣に至る価値形態にふさわしい。だが、貨幣を一般均衡の安定的な媒介者、平穏なニュメレール、実物経済のヴェイルと見なす経済学にたいしてはこの疑念は成立するかもしれないが、貨幣を本質上経済体系の不均衡要因とみなす経済学も少なくない。“価値形態”というマルクスの問題設定は“流動性（選好）”というケインズの問題設定と同様に貨幣を介した経済体系の不安定性をいかに説明するか、という課題に対応していた。<sup>9)</sup>

価値形態は価値概念を前提とし、結果とする。古典派スミスの問題提起以来、貨幣の形成は＜偶然的交換の成立＞と＜全面的交換の不成立＞を組合わせた想定から出発する。そこにスミスと共通するマルクスとメンガーの現実認識と問題意識があった（第Ⅱ節）。ところが両氏は＜貨幣なき交換一般の不成立＞を偶然的交換も成立しない、と理解する。こうして、貨幣は商品交換と同時に一挙に説明されねばならないこととなり、吉沢氏が原始的貨幣の聖観念をもちだして互酬社会の「物質代謝」に問題を後退させたところを、両氏は今度は暴力貨幣の概念をもちだして再分配社会に至る「物質代謝」に問題を移す。<sup>10)</sup> だが、価値形態はなかんずく交換社会の現象であり、問題であって、互酬社会の支配的現象でもなく、再分配社会の支配的現象でもない。

FⅠが本質的暴力でないとすればFⅡ、 $xA=yB$ 、 $=zC$ 、 $=uD$ 、…もまた相互的暴力ではなく、解体の危機に瀕した交換社会でもない。それはまずもって偶然的交換、物々交換の範囲の発展、拡大の基礎の上に立つ、価値形態の発展である。偶然的交換の拡大は自生的なものであり、格別に暴力の介入を要しない。暴力の介入はむしろ物々交換の阻害であり、略奪からついに貢納、徴税に至るであろう。反対に市が定期化し、参加者が増えれば市における交換対象のサーチはより容易となる。あるいは遊牧共同体の移動が活発になれば、それによる接触定住共同体の略奪がひろがるかもしれないが、また物々交換がひろがって特殊的等価物の諸系列が生じるだろう。それが交換社会の危機となる必然は存在しない。ところが、ジラールに依る両氏はこの成員間の交通・交易・往来の発展を相互的暴力の拡大、万人の万人にたいする闘いの膨張と理解し、商品所有者相互が相手の商品を強奪しようとする対立の無限の拡大であると見る。暴力の感染である。ジラールは共同社会、現代では法体系により維持されている社会秩序の発生、形成を説明しようとするのであって、共同体における暴力の感染、血債の流血による返済、がいかに社会に解体の危機をもたらし、それを解体しようとするか（脱差異化）、を熱をこめて語る。彼は、記憶の彼方に消えているが、全員一致、満場一致暴力によるスケープゴートの犠牲（供犠）によってかろうじて暴力の感染を防ぐ秩序を保つ国家的共同社会が生まれる（差異化）、その創世記を語ろうというのである。<sup>11)</sup>

FⅡ、展開された価値形態の分析の任務は異なる。それは自生的に拡大する物々交換が含む価値形態の発展、諸特殊的等価物の発生がかえって価値形態の矛盾を、ここでは商品の価値性格、全面的交換可能性の外的表現が雑多でかつ制限されているという姿において、際立たせるところにある。価値形態の発展は未熟であり、それはFⅢへすすまねばならない。この進行において問われているのは法治国家の形成、文明社会の始源のプロセスの如何ではない。ここでは暴力世界とは別個の、商品交換社会における物々交換の「行詰まり」の打開が、偶然的交換から全面的交換への発展が、問われているのだ。

正統化暴力論においては単一の貨幣の「選別と排除」は供儀（禁忌・儀礼）の当然と見なされる。だが、これまでみたところでは貨幣商品の選別と排除は交換過程のみでは完結しない。そこではむしろ多貨幣の可能性と単一貨幣の必然性が出現するのであってかくしてまた貨幣形成の水平的基礎に、不断に徴税権に立つ、つまり正統化暴力に立つ、国家が独自の動機から介入する契機がある。正統化暴力を相対化しても交換過程の矛盾を解決する貨幣はそもそも不安定なものである。その上、FⅢ、価値実体なき一般的等価「形態」の“選別と排除”とはなにか？ 全商品の貨幣可能性と単一商品の貨幣＝商品への帰着ならば金銀銅他が諸商品のなかから選別され排除されるという意味は了解できるが、「形態」だけを排除するとはなにか？ 特殊的等価物さえ実在しないのにどうして「選別と排除」が可能か。ここにはスケープゴートの選別と排除からの貨幣商品の選別と排除への安易な類推がある。物神貨幣において選別と排除はすでにみたように複雑であり、商品世界にまかせればそこに複数貨幣商品の抗争が現れ、国家が介入すればそこに水平的基礎との相剋が現れる（第Ⅳ節）。

象徴貨幣、記号貨幣はFⅢ、つまり一般的等価“物”，物神貨幣を前提し、その象徴化、記号化をとうしてのみ説明することができる。<sup>12)</sup> 諸商品からの一商品の選別と排除でなければ、FⅢ、一般的価値形態、一般的等価形態、貨幣形態における「選別と排除」は何から何を選別し、排除するのか意味をなさない。

金属貨幣、商品貨幣の19世紀に至るまでの貨幣史をみてもわかるように、この選別と排除に立つ金属貨幣は全面的商品交換を実現し、社会的分業を拡張するものであったが、同時に不安定でかつ非効率的なものであった。そして、増発による税收の代替をもくろむ国家紙幣はさらに交換社会の歓迎すべからざる媒介物であった。

こうして、産業資本主義の確立と発展は近代信用制度に立つ信用貨幣を求めて国民的貨幣制度の安定的な機能を期待したのであるが、18世紀～19世紀以降の信用貨幣、信用制度が経済社会にいかなる不安定性をもたらしただかはこれから考察する

ところである。<sup>13)</sup> 金属貨幣、すなわち、物神貨幣の不安定性、非効率性は、正統化暴力の契機を交換社会の秩序とは相対的に異なる独自の契機として区別しても説明可能である。いやそればかりではない。水平的基礎と垂直的基礎の相剋の枠組によった説明からもわかるように正統化暴力と交換社会とは区別したほうが両者の相関関係が明確になる。<sup>14)</sup>

そしてこの両者の区別と相関は以下、信用貨幣（兌換銀行券、不換銀行券、他）の記号性、象徴性を分析するとき、さらに決定的となる。

正統化暴力による象徴貨幣の形成論は、信用貨幣論においても政治権力によって国民国家を統合するモメントと自己再生産メカニズムをもつ経済体系（資本主義生産の再生産機構）のモメントを相対的に区別し、それから両者の総合に向かうという方法を見捨てる、ないしは軽視する、という難点につまずく。正統化暴力仮説は未熟な共同社会から国家を備えた文明社会を形成する過程——神話時代における国家の創世記——には妥当するやもしれないが、現代信用貨幣という現代における資本主義の金融過程と国家の政治過程の複雑に交錯した社会関係の上に立つ現象を説明するには、いささか素朴にすぎ、「ものがたり」にすぎない。<sup>15)</sup>

まず、両氏の「中央貨幣」のカテゴリーが中央銀行券（中央銀行預金貨幣を含む）と国家紙幣の区別を立てていない、という点が問題になる。

「中央貨幣」A、は両氏にあっては“信用貨幣”ではあるが公共的で補足的な存在である。それはワルサ的な競売人のある組織的な商品取引所取引のニュメレルであり、パティンキン流の現金残高なのだが、それが諸経済単位の赤字、対中央機関債務であり、かくして中央機関の債権をなして、マネーサプライ、ΣA、中央銀行の国民への債務総額がこの国民＝経済単位総計の債権、ΣU、にカバーされている、という形式をとっている。<sup>16)</sup>

これは、現代の中央銀行券を典型的な現代貨幣とみるとき巧みな抽象であり、その重要な一側面を際立たせる。中央銀行券、それはただ自己の保



有する国民に対する債権によって保証されている自己の国民に対する債務証書である。信用貨幣はもしその信用が確実なものとなって履行されるならば、振出人に還流し消滅するから、その貨幣支払約束書という本源的貨幣の代理性は本源的貨幣なしに貨幣機能を遂行する。ここに、信用貨幣が信用関係、債権者－債務者という社会関係に立つ貨幣であり、信用が「確実なものとなって履行されるならば」本源的貨幣は姿を現さなくともよいという、合計＝0の社会的記号であり本源的貨幣の象徴であるということが示されている。

しかも、兌換銀行券ならばこの本源的貨幣は物神貨幣、価値実体貨幣として中央銀行金庫に（あるいは政府委員会金庫に）存在しているのに、現代の不兌換銀行券にあっては資産たる金は兌換されて支払われることはない。この終極的な貨幣性格を支持するものは国民国家の正統支配責任であり、つまりは正統化暴力であり、国民のほとんど否応のないその受容である。<sup>17)</sup> 両氏はこの終極の貨幣が国家によって無制約に発行されうるパラドクスを強調するが、物神貨幣の象徴化、あるいは、物神貨幣の消滅は透明な社会関係を復活するどころか貨幣存在における「社会関係の謎」をいっそう深めるばかりである。

だがしかし、これらの諸点には賛成しても、信用貨幣と国家紙幣は区別されねばならないし、中央銀行信用は商品中央取引所の現金残高の国家による供給ではない。

国民国家が中央銀行のバックに存在するというのは間違いない。中央銀行は政府の銀行であり、公信用の最後の供給機関であり、国民国家の流通＝金融秩序の維持のために諸銀行の「最後の貸手」となる義務を負う。だが、この「最後の貸手」の機能は中央銀行が信用制度ピラミッドの中核に位置するがゆえに可能となるのであり、単にそれが国家紙幣発行機関であるゆえにではない。中央銀行はまず「銀行の銀行」であり、金融機関の中軸なのだ。この機関、中央銀行を公共的な補足的なマネーサプライ（現金残高）の発行機関 X と規定するのは悪しき抽象である。信用関係は国民国家統合とも区別されるし、かつ単なる交換関係とも区別される社会関係である。それは資本主義的

生産過程を前提とし、その流通過程を前提する過程であり、そのネットワークとともにある。たしかに中央銀行は国家＝正統化暴力と不可分であるがそれから相対的に自立した信用ピラミッドの中軸であり、他方、それは資本主義の流通＝金融過程の内部にあるとはいえこの貨幣流通の水平的基礎——ただし資本主義的流通過程——の上に構築されている。

マルクスにそって国家を社会の上部構造とし、交換プロセス、資本主義的生産プロセスを下部構造と規定すれば、中央銀行を軸とする信用制度（そのネットワークとピラミッド）は中間構造と名付けねばならない。信用貨幣の象徴化は、物神貨幣の水平的基礎と垂直的基礎を媒介する信用という中間構造の場において生じる。両氏の「中央貨幣」論においてはこの信用（中央銀行信用）と国家の区別、信用制度の独自の規定、が欠けている。中央銀行券は国家紙幣ではなく、また、その発行量はワルサ的タトヌマンの商品交換の一般均衡に必要な現金残高ではない。

とはいえ、両氏はこの A、中央貨幣と V、私的諸信用貨幣の不可分の連関に貨幣の本質をみているのであるから、A は事実上中央銀行券として理解されており、国家紙幣とは区別されている。ところでしかし、諸経済単位  $i/j$  間の債権－債務関係は相互的暴力の関係なのであろうか。債権者と債務者の間に和解しがたい利害対立があることは当然である。だが、信用関係は主体をことにする貯蓄と投資を橋渡しするものであり、資本（貨幣資本、資金）を社会的に配分する機能をもつ。いうまでもなく信用関係は投資資金（事業拡張のための資本）、流動性（各種目的の貨幣保蔵の必要）の需要と供給をめぐる私的取引であり、直接には債権者（供給者）と債務者（需要者）の間の合意にもとづく私的取引であって、相互的暴力の関係ではない。

もちろん、「相互的暴力」にせよ、「暴力の感染」にせよ、「一極集中」の投機にせよ、これらの表現は両氏による金融不安定性の“比喩”なのであろうけれども、いま流動性の需給を捨象すれば、V は投資需要、期待利潤展望のもとでの借入と返済見込による貸出の相互利害の一致関係から信用

の授受が行われて発生するのであって、信用関係の成立における両者の利害一致と貸付－返済関係の一定の順調な進行が、Vの存在にあたってともあれまずは想定されている。むしろ、期待利潤と実現利潤は一致せず、過去－現在－将来の期待と現実の交錯のうちに進行する収益入手のキャッシュ・フローと返済（時期・利子率）のキャッシュ・フローの不一致、齟齬は通常の出来事である。授受された信用が「確実なものとなって履行されるならば」という条件が保証されないのがまた信用の本質である。そこにVの不確かさがあり、資本主義的生産過程の順調な進行が“結果として”虚偽、ペテン、幻想となり、信用の危機が訪れる根拠がある。<sup>18)</sup>

こうして通貨危機、デフレーションとインフレーションの危機がいわば一種の必然となるのだが、通常はこの危機に成長金融のユーフォリア（多幸症）が先行するのであって、相互的暴力の危機現象はようやくこのユーフォリアの破綻が明瞭になってから生じる。ミンスキーは完全雇用ユーフォリアの時期は過度の信用、楽観が支配し、それが破綻の結果を導くとする。投資資金を借入れた資本家の収益フローの見込には、この時期当初は利潤－賃金関係、利潤－利子関係の“好循環”が作用し、資本ストック－貨幣流動性保有－金融資産ストックの“堅実な”資産構成が選択され、金融においても、ヘッジ金融－投機金融－ポンツィ型金融のなお“危険の少ない”金融構成が債権者側にも債務者側にも支配的である。資本蓄積の進行はこの完全雇用の好循環、均衡領域内のリスクをしだいに覆し、やがて金融上の不安定を露呈する。<sup>19)</sup>

V、私的諸貨幣、の支払不能、中央銀行による再金融の供与、あるいは拒絶の状況は信用制度に常時存在するものではなく、成長金融期には隠され、その多幸症の後に出現する。i/jの間の暴力が感染し、正統化暴力が介入せざるをえない状況に至るのはこうした状況下においてである。経済の一定の限界内の成長、均衡領域内の資本蓄積はインフレーションあるいはデフレーションの通貨危機に向かう相互的暴力の“比喩”や危機における正統化暴力の介入、貨幣秩序の再建に先立っている。<sup>20)</sup>

現代貨幣の象徴性を問題にすると、正統化暴力の作用、すなわち、国家の経済への恒常的な介入と信用を含む経済過程の自律的な運動を区別し、その上でそれら相互の連関を考察することは決定的に重要である。1930年代の資本主義の体制危機を介しての金本位制から管理通貨制への歴史的転化において信用貨幣は金という物神的基礎から離れ、それにより以後、中央銀行券は価値実体との直接の連結（兌換性）を失い、非価値実体貨幣となった。たしかに信用貨幣としてはそれはこの時期まで金貨幣の代理であったのだが、以後は本源的貨幣＝金を代理するものではなくなった。

この兌換銀行券の不換銀行券への転化は信用貨幣の現代信用貨幣への進化という質的变化を示すものであり、どちらの貨幣をも正統化暴力によって基礎づけるならば両者の相異をほとんど無視するに等しい。現代貨幣はこの管理通貨制への転化とその定着によりはじめて二階の象徴化を完成したのである。銀行券もすでにして代理貨幣の象徴性格を保持しているのだが、なお金＝貨幣というアンカーをもっていたのであり、金支払手段という代理性を保持していたのである。管理通貨においては異なる。中央銀行券の機能を支えるものは中央銀行の背後に立つ国民国家である。私のいう信用制度の中間構造が国家の上部構造と直結したのだ。両氏の設定した「中央貨幣」概念もまたこの変化に照応したものと推定できる。

この中央銀行券の兌換停止、私の記号ではNのN'への転化は古典的な資本主義、自由放任資本主義の抜本的な修正、自由放任の終焉の一徴標であって、その他の資本主義経済体制の修正の特徴、私財貨（市場）にたいする公共財（再分配）の比重の増大、財政・金融政策等の補整政策の体系化、完全雇用と経済成長にたいする国家責任の承認、等の一連の資本主義の本質的変貌と一組になったものである。<sup>21)</sup>これにより経済は資本主義の体制危機をのりきるとともに、「市場の失敗」に「政府の失敗」を加えた二重の困難にも直面することとなる。<sup>22)</sup>正統化暴力が信用制度に遍在し、交換社会（商業社会）に最初から遍在するならば、国家によるかかる経済への介入によって20世紀資本主義、戦後資本主義の独自の特徴は産まれるこ

とはならなかったであろう。だが、国家と経済の混合システム（ハンセンの二重経済）は30年代以降、とくに第二次大戦以後のものであり、なかなく信用貨幣におけるNのN'への進化を特徴づける。

物神貨幣の象徴貨幣への進化がとくに重要なのはこうした関連においてである。それは、資本主義という経済体制の19世紀的なものから20世紀的な、現代的な、独自の体制への修正、変貌、進化の部分問題である。

#### 〔註〕

- (1) A=O, *op. cit.*, 2 centralisation et fractionnement, 前掲訳, 第二章。
- (2) マルクスは古典派から労働価値説と階級分析（賃金・利潤・利子・地代の分配論）を継承、かつ転覆し、それを資本主義社会の革命的批判の学（彼の言う『経済学批判』）に作り直したが、思想上、哲学上は古典派とはまったく異った立場に立った。物神性論と疎外論は彼の経済学（批判）を独自のものたらしめた。
- (3) 岡田裕之『社会主義経済研究』I, II, 同『ソヴェト的生産様式の成立』, 法政大学出版局, 1975-1991年。
- (4) ジラルールの思想を「仮説」ではなくあえて「仮設」としたのは、それが検証、反証を可能ならしめる仮説というには広大に過ぎ、包括的に過ぎるからである。しかし、これはグランド・セオリーへの批判ではなく敬意の表現である。
- (5) ジラルールは一方では「確証をじかに握りたい理想」の断念について語り、「私に用意できる経験的証拠は微々たるもの」と言うが、他方では「膨大な証拠を手際よく盛りこむことは可能」とし、「私が利用しようとした証拠をこれまでほとんどだれひとり検討しようとしなかった」とも言う。このような「仮設」は専門研究者には扱い難い。ジラルール, 前掲訳, 1985年（『ミメシスの文学と人類学』）, 第十章, 参照。
- (6) 互酬（統合）・再分配（強制）・交換（市場）のシェーマは応用が広く、有用である。たとえばウォーラーステインの世界市場＝資本主義論の構想もこれに依るし、ボールディングの経済学も多

くこれに依っている。ウォーラーステイン, 田中他訳『世界経済の政治学——国家・運動・文明（1984）』同文館, 1991年, ボールディング, 公文訳『経済学を超えて（1968）』竹内書店, 1970年, 同, 公文訳『愛と恐怖の経済（1973）』佑学社, 1977年, 等, 参照。

- (7) 国家紙幣の投入＝発行については、第Ⅲ節, 参照。
- (8) 交換過程の行詰まりは、xAの側からみればxAを相手が欲しようと欲しまいと自分が欲しいyBと「取り換えたい」ということとなり、yBの側からみればyBをxAの所有者が欲しようと欲しまいとxAと「取り換えたい」ということになる。ここでは左辺から見ても右辺から見ても事態は同じである。交換社会ではこれは行詰まり、貨幣を要請するが、互酬も交換も作用しなければ“腕ずく”になろう。暴力が同等ならば衝突し、優劣が定まれば略奪か貢納（弱者ゆえの贈与）に至る。第Ⅱ節, 参照。
- (9) 「価値形態」も「流動性」も＜価値論＞を前提し、想定する。マルクスもケインズも時代の主流経済学（19世紀末の古典派, 20世紀初頭の“新”古典派）に挑戦し、代替する経済学を求めた。＜価値論＞の設定は資本主義なり、現代資本主義なりという対象がみずからの経済カテゴリーをもち、再生産メカニズムをもち、ワーキングをもつことを承認する。ア＝オ両氏はこれを認めない。かくして両氏は＜価値論＞に不信を抱く。＜価値論＞の設定はたしかに経済システムの自己維持、自己再生産を想定するから、暗黙のうちにシステムの永久自己運動を論証しがちであり、システムの合理性への信念を産み、あげく経済システムの「無矛盾性」の論証にたどりつく危険をはらむ。両氏は伝統的経済学の双方を批判し、そのために＜価値論＞を排除し、代わって変化する「制度」を設定する。
- (10) 吉沢氏にあっては原始的貨幣＝聖観念は互酬、儀礼的交換の媒体であり、共同社会に身近な聖観念＝象徴であった。ア＝オ両氏にあっては異なる。貨幣＝記号は暴力の産みだすものであり、流血の供犠に立つ。
- (11) 「法体系は、復讐を合理化し、思いどおりにそれを切り取り、限定することに成功する。……

このような復讐の合理的処理は、法体系が共同体の中に直接的かつ深く根づいてことを意味しない。逆にそれは、全権を委託され、共同体のいかなる集団、満場一致の総意を結集した集団でさえも、すくなくとも原理的には、その決定を覆すわけにはいかない法体系の至上の独立性に根ざしているのだ。……結局のところ、法体系と供犠は同じ機能をもっているが、法体系の方がはるかに有効である。けれどもそれは、まさに強力な政治権力と結びついてしか存在できない。すべての技術進歩と同様、法体系は抑圧と自由という両刃の剣である。」ジラル、前掲訳『暴力と聖なるもの』36頁。ここではデュルケムの穏やかな象徴は消える。ジラルの主題は原始的宗教から君主制への移行である。原始的社会は古代的社会に変貌してゆく。

(12) A=O, *op. cit.*, pp. 41~42, 56~58, 82, 123, 前掲訳, 45~48, 70~72, 111, 171頁。両氏は事実上、一般的等価である物 *objet* が選別-排除され、しかる後に貨幣が非物質化 *dématérialisation* される、と説明している。

(13) 第IV節、参照。

(14) たとえば、正統化暴力・軍事力と流通・金融的社会の区別と関連という観点は、現代中国における民国法幣制度(1933年~1949年)から社会主義中国の人民幣制度成立(1931~1949, ~1955年)に至る、日幣(日本占領軍-傀儡系通貨, 1932~1945年)を混じえた激しい三種類の通貨闘争史の分析に不可欠である。この史実は「儀礼と禁忌」の神話時代に遡ることなしに、暴力と貨幣の関係を考えさせる。この時期、中国貨幣の状況は清末の諸貨幣の混乱をうけた民国初期の雑多きわまりない諸通貨の法幣による整理から、三貨闘争期を経て統一的政治権力と流通・金融基礎に支えられた国民的貨幣形成に至る。この正統化暴力を背景にした統一的国民貨幣の形成は、銀鑄貨から不換銀行券(政府紙幣性格の強い)に至る物神貨幣の象徴化の過程でもあった。

もちろん、この経過を本稿の主題である貨幣の象徴化の典型とすることはできない。これはむしろ、世界貨幣史のいわば裏の側からの物語である。なぜならば、その一応の終点が社会主義貨幣であって、われわれが問題とする現代資本主義における信用貨幣ではなく、まさに資本主義対社会主義の

体制対立の世界史的展開と結びついた事態を担ったものであるからである。私見によれば管理通貨制の成立-確立の歴史的背景はこの対立に存した。(社会主義貨幣については私の研究があり、さしあたりそれを正しいものと仮定しておく。だが、それはなにぶんにも旧ソ連を典型においた20年前の研究であり、満足すべきものではない。岡田『社会主義経済研究』Ⅱ, 1979年, 参照。) 出発点もまた発達した信用システムにおける信用貨幣ではなく、地方的分裂はなほだしい従属的後進国の銀貨幣に立つきわめて未熟な信用貨幣であった。

この期の研究には、日本語文献だけでも宮下忠雄『中国の通貨・金融制度』アジア経済研究所, 1965年, 小林英夫『「大東亜共栄圏」の形成と崩壊』御茶の水書房, 1975年, 岩武照彦『近代中国通貨統一史』(上・下)みすず書房, 1990年, 等重厚なものがあるが、本節の主題に関係する限りであえて貨幣史の経過を要約すると、次のように言えよう。

①貨幣の形成はここでも前提されている。不十分ながらも商品流通と貨幣流通は発展しており、社会主義中国はこれに本質的な制限を加えたが消滅させることなく継承した。

②諸地方の金融機関、政権等の乱造する多貨幣の混乱は法幣制度から人民幣制度にいたる経過のうちに統一的な国民的貨幣制度に変わった。これは従属的分裂になやむ近代中国の独立した国民経済形成過程の一環であった。

③統一的国民貨幣制度形成の動因は軍事的勝利を背景にした正統化暴力である。三貨闘争における通貨圏の消長は、満州・華北・華中・華南/都市と鉄道(点と線)・農村、における軍事力に左右された。暴力は貨幣を形成しないが分裂した貨幣制度を国民的に統一しうる。

④正統化暴力はしかし単なる暴力、軍事力でない。侵略者の占領軍にすぎない力を背景にした日幣はついに正統性を保持しえず敗北した。満州日幣(満銀券)が多少とも安定した流通を果たしたのも傀儡政権の看板と漢族主体の国民党、共産党支配が一定期間この地域に及ばなかったためであった。国民党=資本主義、アメリカのバック対共産党=社会主義、の正統性の間の闘争においては反帝国主義=抗日の理念の作用、軍官の党規律の厳正、等が軍

事戦略の成功とあいまって、共産党支配を勝利に導いた。

- ⑤三権力がそれぞれの貨幣を保持しようとした動機は経済的には軍事的、産業的な国家経費を賄い、戦争のための物資動員を行うためであり、かつ支配圏内部の経済、民生の安定のためである。この「物資収奪」と購買力安定を介する「民生安定」は矛盾する。三貨幣ともに“圓”表現の共通性を保ったから交換（流通—金融）社会にとっては有利かつ安定した通貨を選択する幅があった。
- ⑥かくて三貨の背後にある権力は貨幣購買力維持のため商品供給の裏付け、金融—流通機構の掌握に腐心せざるをえなかった。大平洋戦中における日本からの物資輸送の途絶、制限、禁止は現地収奪増大にプラスして日幣のインフレ、減価、信用失墜を甚だしくした。戦中の辺区幣（共産党支配地区の通貨）もまた法幣、日幣と抗争したが、購買力維持のために人民軍の自給自足、外貨（法幣や日幣）の集中統制などの手段を講じた。日本、共産党、国民党は時と所において自幣の強化と他幣の信用失墜、時には他幣の利用を目指した。法幣には米英によるバックがあったが対日戦勝後の金圓券に失敗、内戦期の激しい通貨膨張、減価のうちに信用を失墜した。

三貨の通貨闘争はかくして軍事力、正統支配力、通貨購買力、物資調達力をめぐる政治的かつ経済的な闘争であった。暴力は貨幣に関わるどころ大きい、それは貨幣の形成を説明せず、国民経済統一圏形成を説明しても交換社会、流通・金融の独自の運動を説明しない。

この経過について読みやすいものに小林英夫『日本軍政下のアジア——「大東亜共栄圏」と軍票——』岩波新書、1993年、がある。

- (15) 相互に有機的に関連する多面的な社会現象を実証—反証可能な範囲において認識しようとする努力ははじめから矛盾しているとはいえよう。それは際限のない専門分化を招いて諸学を相互に無関係にし、独立化して、個別認識の拡大が果たして総合するといかなる社会認識に到達するかが不明になる。ジラールやフーコー等の“知の新地平”に立つ人々からすれば総合こそが一切を決定する

のであって、狭い積み重ねから成る「専門社会科学」こそ疑わしい。暴力は人間社会に遍在し、経済にも政治にも共通する。あるいは政治権力の一部の支配者が保持したり行使したりするものではなく、性的欲望や性的言説にも遍在する関係であり、もちろん、生産にも遍在する関係である。フーコー、渡辺訳『性の歴史（1976—1984）』ⅠⅡⅢ、新潮社、1986年、参照。

だが、正統化権力の政治理論においても、金融過程を分析する信用貨幣理論においてもそれぞれの専門家が理論、モデル、実証—反証を積み重ねてきた学的蓄積は膨大である。私には上部構造と下部構造の相対的な区別、そこから派生する“中間構造”の設定、正統化暴力を分析する政治理論と貨幣・金融を分析する経済理論の区別、それを前提とした上での政治=経済の混合、二重化に即した二方面の理論、分析の総合、といった段取りの方が着実に思える。

- (16) 現代信用貨幣が国民にたいする債務証書であり、しかもそれが国民にたいする債権によって保証カヴァーされている、という姿にあることはつまりまらぬ形式ではなく重要な社会関係を表現する。

商業銀行の預金貨幣もまた債務証書であり、銀行の保持する債権によってカヴァーされるのだが、国家のバックはなく、あくまでも自己責任の営利企業の発行する中央銀行券支払約束書にすぎない。両氏による統一的貨幣と私的貨幣の両義性についての指摘はシステムとしての信用貨幣の特質を示す。ここに「最後の貸手」がどこまで商業銀行を支えるか、という問題が生じる。

- (17) 権力支配の根拠はいうまでもなく単なる暴力装置、つまり軍隊、警察、監獄にはない。支配にとってそれらの強制実力が必要であるのは確かであるが、むきだしの暴力支配は国家的支配ではない。それは法体系の超越性を信じる国民が存在してはじめて成立しうる。また理念国家であればその統合理念が、支持するもの、被支配者、に受容されていなければならない。ソ連邦という国家は核兵器を備えた軍・警・獄の力をもったまま成員にその共産党独裁の正当性=正統性を疑われ、建国の大義を疑われて、革命運動も内戦もなしに1991年末自壊した。

- (18) 1980年代後半、先進資本主義諸国に深刻なバ

ブルが生じた。為替高を回避し、低金利で内需拡大を計った日本経済は「円高好況」、金融の自由化・国際化の下に不動産投機が進行、土地価格高騰神話、株価の「右肩上り」神話がかさなって、「堅実」な銀行の「有担保原則」がかえって巨額の放漫信用、過剰信用を産み、非金融企業も軒並みに金融投機に走った。しかも低金利、金融資産含み益増は実質投資、消費を増大させた。「日本の経営」は世界を制覇したかのごとくであった。90年株価、地価下落により「堅実」にみえた信用の多くがいかに危険な、返済保証のあやふやな、スキャンダルまがいのものであったか、が判明した。銀行、金融機関の不良債権はいまだもって清算されていない。野口悠紀雄『バブルの経済学』日本経済新聞社、1992年、他、参照。

ただし、80年代後半は一般物価は沈静、ときに低下したからこの投機はインフレーションによって、あるいはインフレーションとともに、生じたとはいい難い。80年代後半の日本ではマネーサプライは実体経済、物価との関連を失い、もっぱら株価との関係を強めた。『日本経済の現況』平成5年版、66～76頁、参照。この時期アメリカではインフレ沈静下にクレジット・クランチによる金融機関（とくにS&L）の破綻が増加した。

(19) 完全雇用金融の時期にはすべてが「堅実」に見える。成長金融の多幸症が産まれるのはこの時である。Minsky, *op. cit.*, (*Inflation etc.*, 1982), pp. 120～161, 前掲訳, 181～237頁, 他, 参照。ポンツィ型金融については *ibid.*, pp. 23, 28～29, 同訳, 47～48, 54～57頁, 参照。

(20) 両氏もすべてのインフレーションが危機的な投機に向かう、とは言っていない。資本蓄積に照応するある程度正常な成長金融はなければならない。「……インフレーションは物価と賃金のインデクセーションの速度の差から生じる強制貯蓄を通して投資と成長を促すことがありうる。これに対して、……脅威となるのは、物価騰貴に火がついて、貨幣主権がかって生みだした生産的空間の構造をしだいに掘り崩すような無政府的な物価騰貴である。」A=O, *op. cit.*, p. 99, 前掲訳, 137頁。

だが、成長促進の物価騰貴と無政府的物価騰貴の区別よりはミンスキーの（完全雇用）成長金融に内在する多幸症の分析のほうが明快である。

(21) 歴史的にはまず大戦時における財政支出の規模拡大が復元せず、移転支出を含む社会支出増となる傾向、普通選挙権と結びつく労働階級・労働者政党進出、社会権の承認の傾向、失業回避、完全雇用の政府責任の受容、所有と経営の分離、相続税増大による所有者階級の後退、新中間層の増大、教育水準の上昇、等々の作用があり、旧来の19世紀的な、個人資本家支配時代の資本主義は根本的に変わってくる。金本位制から管理通貨制への転換、物神貨幣の象徴貨幣への進化もこの全体的な資本主義変貌の一部である。

(22) 「市場の失敗」と「政府の失敗」は現代において不可分とも言えるが、またそれぞれの失敗は独自のものとも言えるのであり、両者を最初から混合体においてとらえるよりも、相対的に区別した上でそれから併せて考えた方が理解し易い。またその方が歴史と理論にも照応しているし、専門研究者の領域に適合している。ケインジアン・マネタリスト論争は「市場の失敗」をどこまで政府が是正するかという問題でもあって、現代の批判的な、反主流派の貨幣論もまたこの二元の問題意識から構成される。

カレツキ＝ミンスキーにおいても、金融プロセスが媒介するマクロ・モデルは、(1)利潤＝投資、→(2)税引後利潤＝投資＋政府財政赤字、→(3)税引後利潤＝投資＋政府財政赤字－貿易収支赤字、→(4)税引後利潤＝投資＋政府財政赤字－貿易収支赤字＋利潤からの消費支出－賃金所得からの貯蓄、の4段階で組立てられる。金融がこの(1)(2)(3)(4)のいかなるマクロ経済を媒介するかによって、その不安定性の様相が変化して行くのは言うまでもない。Minsky, *op. cit.*, chap. 2. 4. 5, 前掲訳, 第2章, 第4章, 第5章, Kalecki, *op. cit.*, 前掲訳。

貨幣と金融が当初から正統化暴力（国家によるマクロ経済統合を伴う）によって説明されると、これらの段階を追った説明が不可能となり、かくて市場の失敗（または成功）、政府の失敗（または成功）と両者の組み合わせによる補整（または二重の失敗）の分析も不可能になる。